



Test Services

管理ガイド

注意

文書情報

文書番号 : D0015137ja
2022 年 4 月

著作権

© Agilent Technologies, Inc. 2022

本マニュアルの内容は米国著作権法および国際著作権法によって保護されており、Agilent Technologies, Inc. の書面による事前の許可なく、本書の一部または全部を複製することはいかなる形態や方法（電子媒体への保存やデータの抽出または他国語への翻訳など）によっても禁止されています。

Agilent Technologies, Inc.
5301 Stevens Creek Blvd.
Santa Clara, CA 95051

ソフトウェアリビジョン

このガイドは改訂版が発行されるまで Test Services のバージョン 3.5 以降に対応しています。

保証

このマニュアルの内容は「現状有姿」提供されるものであり、将来の改訂版で予告なく変更されることがあります。Agilent は、法律上許容される最大限の範囲で、このマニュアルおよびこのマニュアルに含まれるいかなる情報に関しても、明示黙示を問わず、商品性の保証や特定目的適合性の保証を含むいかなる保証も行いません。Agilent は、このマニュアルまたはこのマニュアルに記載されている情報の提供、使用または実行に関連して生じた過誤、付随的損害あるいは間接的損害に対する責任を一切負いません。Agilent とお客様の間に書面による別の契約があり、このマニュアルの内容に対する保証条項がここに記載されている条件と矛盾する場合は、別に合意された契約の保証条項が適用されます。

技術ライセンス

本書で扱っているハードウェアおよびソフトウェアは、ライセンスに基づき提供されており、それらのライセンス条項に従う場合のみ使用または複製することができます。

権利の制限

米国政府の制限付き権利について：連邦政府に付与されるソフトウェアおよび技術データに係る権利は、エンドユーザーのお客様に通例提供されている権利に限定されています。Agilent は、ソフトウェアおよび技術データに係る通例の本商用ライセンスを、FAR 12.211（Technical Data）および 12.212（Computer Software）、並びに、国防総省に対しては、DFARS 252.227-7015（Technical Data -Commercial Items）および DFARS 227.7202-3（Rights in Commercial Computer Software or Computer Software Documentation）の規定に従い提供します。

安全にご使用いただくために

注意

注意は、取り扱い上、危険があることを示します。正しく実行しなかったり、指示を遵守しないと、製品の破損や重要なデータの損失に至るおそれのある操作手順や行為に対する注意を促すマークです。指示された条件を十分に理解し、条件が満たされるまで、**注意**を無視して先に進んではなりません。

警告

警告は、取り扱い上、危険があることを示します。正しく実行しなかったり、指示を遵守しないと、人身への傷害または死亡に至るおそれのある操作手順や行為に対する注意を促すマークです。指示された条件を十分に理解し、条件が満たされるまで、**警告**を無視して先に進んではなりません。

本書の内容

本書では、Agilent Test Services ツールを長期間にわたり高いパフォーマンスを維持しながらご利用していただくための管理手順について説明しています。本書は、Test Services ツールのシステム管理者向けのガイドです。OpenLab CDS ソフトウェアの管理者としての基本的な知識があることを前提としています。

1 はじめに

この章では、Test Services と、QualA テストを有効にする QualA のライセンスについて説明します。

2 管理

この章では、Test Services の管理タスクについて説明します。

3 トラブルシューティング

この章では、Test Services の使用中に発生する問題のトラブルシューティングとエラーメッセージの解決方法について説明します。

目次

1 はじめに 6

概要 7

Test Services システムのアーキテクチャ 8

Test Services の開始 11

2 管理 12

インストールされるサービス 13

ライセンス 14

Test Services 用のユーザーアカウント設定 15

Test Services ユーザーのロールと権限 15

必要なロールと権限 16

OpenLab ECM 3.x での Test Services ユーザーロールの作成 17

ログ 19

Test Services のログ 19

Test Services の設定 20

ポート番号の変更 20

Test Services のインストール後に OpenLab CDS コンフィグレーションを変更した場合 22

Test Services のインストール後に認証を変更した場合 22

Test Services テスト結果の保存場所 23

OpenLab Server および ECM XT 23

ECM 3.5 および 3.6 23

セキュリティと証明書 24

Test Services にサードパーティの証明書を設定 24

3 トラブルシューティング 26

トラブルシューティング 27

結果が不合格となる 27

ワークフロー検査中にシーケンスが停止する 28

Test Services のプロジェクトと機器 29

電子メール通知が機能しない 30

エラーメッセージ 31

Test Services エラーメッセージ 31

OpenLab CDS ワークフロー検査エラーメッセージ 34

1

はじめに

概要 7

Test Services システムのアーキテクチャ 8

この章では、Test Services と、QualA テストを有効にする QualA のライセンスについて説明します。

Test Services は、OpenLab CDS をインストールすると自動的にインストールされます。ライセンスなしで利用できる一連の検証テストも含まれます。QualA for OpenLab CDS および QualA for OpenLab Server ライセンスを追加すると、現在インストールされている Test Services バージョンに対応する追加の CDS 検証テストが有効になります。

Test Services の使用方法については、『Test Services ユーザーガイド』を参照してください。

概要

Test Services は、OpenLab CDS をインストールするとインストールされます。インストールおよび検証テストの実行フレームワークが含まれます。一部のテストはデフォルトでインストールされ、ライセンスなしで有効になっています。インストールされた Test Services の CDS プラグインには、OpenLab CDS 固有のテストが含まれます。これらのテストには、実行するのに QualA ライセンスが必要なものもあります。

ライセンスのインストール方法については、「[ライセンス](#)」（14 ページ）を参照してください。

注記

OpenLab CDS Workstation Plus システムには適用可能なすべてのライセンスが含まれています。その他の CDS 製品の場合、ライセンスを要するテストを実行するには、ライセンスを購入してインストールする必要があります。

Test Services システムのアーキテクチャ

CDS ワークステーションと Workstation Plus での Test Services の構成例を図 1 に示しています。OpenLab Server/ECM XT を使用した OpenLab CDS クライアント / サーバー環境での Test Services の構成例を図 2 と図 3 に示しています。ECM ストレージ用 Test Services の例を図 4 に示しています。

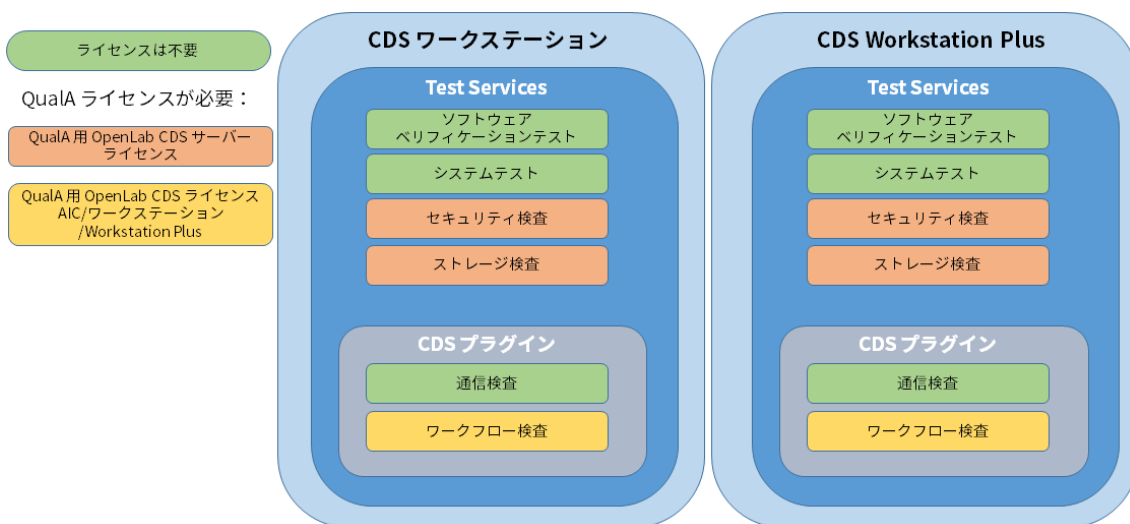


図 1 ワークステーションまたは Workstation Plus の Test Services

注記

OpenLab CDS Workstation Plus にはすべての QualA ライセンスが含まれます。その他のシステムでは、QualA ライセンスを別途購入する必要があります。

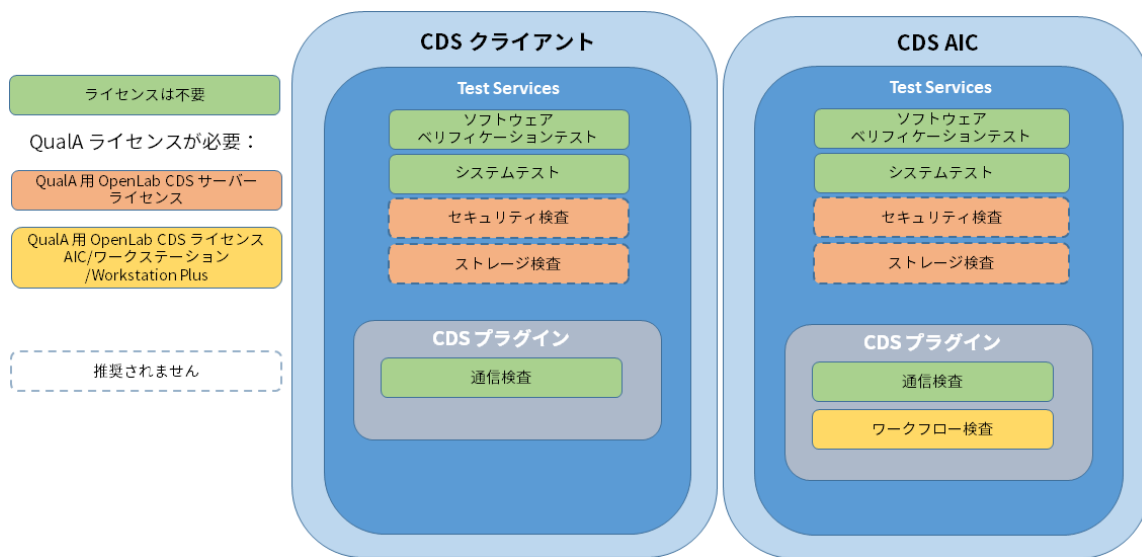


図 2 CDS クライアントまたは AIC の Test Services

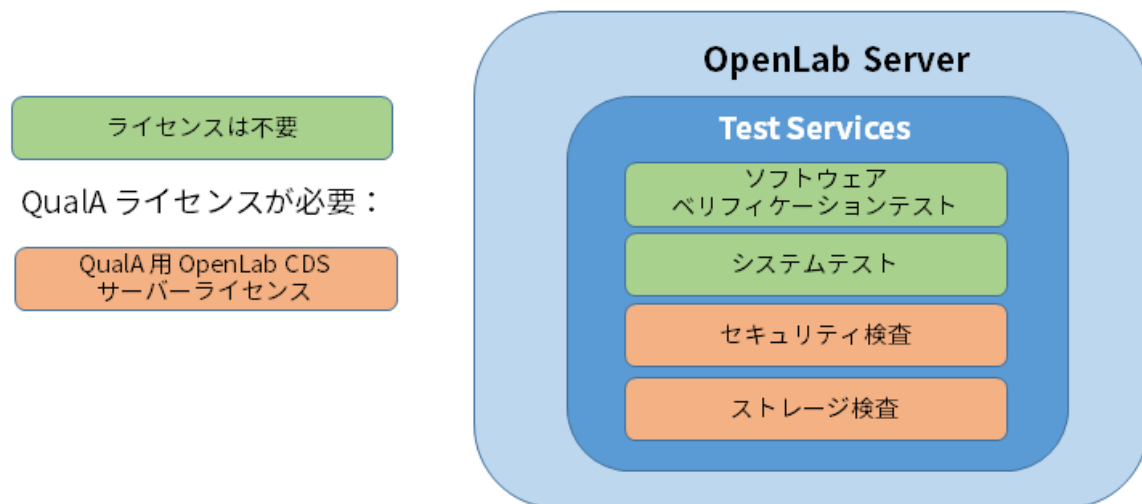


図 3 OpenLab Server の Test Services

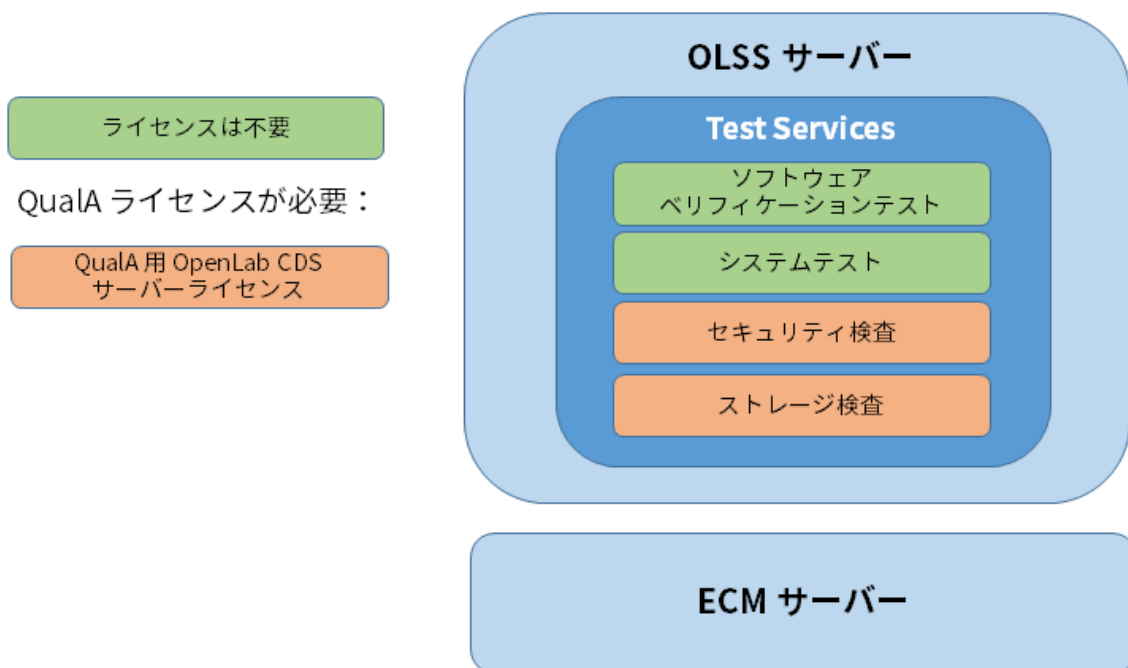


図 4 OpenLab ECM の Test Services

Test Services の開始

ブラウザを使用して Test Services にアクセスします。URL には Test Services がインストールされたコンピューターを指定します。

Test Services のユーザインターフェイスを開く URL の例を以下に示します。

`https://<hostname>/testservices/`

例：`https://localhost/testservices/`

クライアントシステムで、Test Services にローカルでアクセスするには `https://localhost:9092/` を使用する必要があります。リモートの Test Services にアクセスする必要がある場合は、`https://<client-fqdn>:9092/` を使用してください。クライアントシステムにファイアウォールが設定されている場合、ポート 9092 がオープンになっていることを確認してください。

2

管理

インストールされるサービス 13

ライセンス 14

Test Services 用のユーザーアカウント設定 15

ログ 19

Test Services の設定 20

Test Services テスト結果の保存場所 23

セキュリティと証明書 24

この章では、Test Services の管理タスクについて説明します。

インストールされるサービス

Test Services をインストールすると、Agilent Test Services という名前の Windows サービスが作成されます。

OpenLab ワークステーション、Workstation Plus、およびサーバーの場合、Agilent Test Services Central Management サービスも作成されます。サーバーにインストールされる Agilent Test Services サービスは、このサービスに依存しています。

サービスが起動しているかどうかを確認するには、Windows の [ファイル名を指定して実行] を開き、`services.msc` と入力して **[OK]** をクリックします。

Test Services サービスはローカルシステムアカウントで実行されるように設定されているため、ユーザーの操作は不要です。

注記

Agilent Test Services サービスは、Agilent OpenLab Shared Services (OLSS) サービスに依存しています。また、操作の実行においては OpenLab CDS ソフトウェアのほとんどが OLSS サービスに依存しています。OLSS サービスでは、依存しているシステムコンポーネントとして表示されます。システムを再コンフィグレーションした場合は、新しいコンフィグレーションを利用するために OLSS サービスと Agilent Test Services サービスを再起動してください。

ライセンス

Test Services へのログイン、OpenLab ソフトウェアインストールの確認 (SVT)、システムレポートの実行、通信検査の実行、前回のテスト結果の表示、実行履歴からレポートへアクセスをする場合については、ライセンスは必要ありません。ただし、OpenLab セキュリティ検査や OpenLab ストレージシステム検査を実行するには QlaSecurity ライセンスが必要です。ワークフロー検査を実行するには QlaCDSWorkflow ライセンスが必要です。ライセンスが必要な検査を実行するマシンごとにライセンスが 1 つ必要です。

ライセンスは、ライセンスが必要な検査の初回実行時に取得され、検査の完了後も取得されたままになります。(検査が完了してもライセンスプールにリリースされません。)

QualA ライセンスは、OpenLab コントロールパネルの [管理] タブにある [ライセンス] オプションからインストールします。ライセンスが必要な検査を実行する前に、ライセンスをインストールする必要があります。ライセンスの数が不足している場合は、Agilent サポートにお問い合わせの上、追加のライセンスを取得してください。

Test Services は、OpenLab CDS のライセンスと同じサブシステムを利用します。ライセンスファイル内で、セキュリティ検査およびストレージシステム検査の機能名は QlaSecurity、ワークフロー検査の機能名は QlaCDSWorkflow です。

注記

OpenLab CDS の 60 日間のスタートアップライセンスでは、Test Services で OpenLab のライセンスが必要な検査を実行することはできません。ライセンスが必要な検査を利用するには、QualA のライセンスを購入してインストールする必要があります。

サーバーをリタイアさせる場合は、Test Services をアンインストールして利用可能ライセンスのプールに QualA ライセンスを戻してください。

QualA ライセンスが必要な検査では、ユーザーが該当する検査の [開始] ボタンをクリックするとライセンスが取得され、(ライセンス取得済) メッセージが検査名の横に表示されます。

テストの実行に必要なライセンスが不足している場合は、テストの 2 番目のステップ (ライセンス < ライセンス名 > をチェック) でテストが不合格になります。

ライセンスが取得できなくても、以前に実行した Test Services の結果は引き続き表示できます。

Test Services 用のユーザーアカウント設定

Test Services は OpenLab Shared Services (OLSS) の認証を使用します。各認証プロバイダーの設定方法については、『*OpenLab CDS クライアント /AIC ガイド*』または『*OpenLab CDS Workstation Plus (Content Management 付き) ガイド*』を参照してください。

注記

認証なしのワークステーションの場合、ユーザーのログインは不要なため、このセクションは適用されません。

Test Services ユーザーのロールと権限

インストール後は、OLSS 管理ユーザーとしてログインします。始めてログインしたときに、プロジェクトの新しいロール「Test Services 管理者」と「Test Services ユーザー」が作成されます。新しい権限、「Test Services の実行」と「Test Services の管理」が OLSS に作成されます。「Test Services 管理者」は、「Test Services ユーザー」ロールのすべての権限に加えて「Test Services の管理」権限を持っています。デフォルトでは、「すべて」のロールを持つユーザーにこれらの権限が自動的に割り当てられます。

「すべて」のロールを持たないユーザーには、OpenLab コントロールパネルからユーザーのプロファイルに「Test Services ユーザー」ロールを割り当てる必要があります。「Test Services ユーザー」ロールを割り当てられたユーザーは、Test Services へのログインが可能となり、システムレポートおよび OpenLab ソフトウェアインストールの確認 (SVT) を実行できます。

ユーザーの追加やユーザーのロールと権限の変更方法については、OpenLab CDS コントロールパネルのヘルプを参照してください。

OpenLab ECM を使用する場合は Test Services 権限については、「**OpenLab ECM 3.x での Test Services ユーザーロールの作成**」(17 ページ)を参照してください。

表 1 Test Services ロールに含まれる権限

権限	Test Services 管理者	Test Services ユーザー
プロジェクトまたはプロジェクトグループの表示	x	x
プロジェクトまたはプロジェクトグループの管理	x	x
プロジェクトコンテンツの編集	x	x
Test Services の実行	x	x
Test Services の管理	x	

必要なロールと権限

検査を実行するには、「Test Services ユーザー」ロールに加えて、以下の権限が必要です。

注記

認証を用いるワークステーションの場合：なし。権限は適用されません。

表 2 各検査を実行するために必要な権限（「Test Services ユーザー」ロールに加えて必要）

権限	ソフトウェア インストール の確認	システム レポート	セキュリティ 検査	ストレージ 検査	通信検査	ワークフロー 検査
セキュリティの管理			x	x*		
アクティビティログの表示			x	x†		x
機器またはロケーションの 表示					x	x
機器またはロケーションの 管理					x	x
シーケンスの作成と編集						x
機器の実行						x

表 2 各検査を実行するために必要な権限（「Test Services ユーザー」ロールに加えて必要）

権限	ソフトウェア インストール の確認	システム レポート	セキュリティ 検査	ストレージ 検査	通信検査	ワークフロー 検査
プロジェクトコンテンツの 削除						X**
測定中のシーケンスを編集 または 測定中のすべてのシーケン スを編集						X

* 内部 / ドメイン認証を用いるワークステーションの場合、ストレージ検査には「セキュリティの管理」権限は不要です。

** 内部 / ドメイン認証を用いるワークステーションの場合、ワークフロー検査には「プロジェクトコンテンツの削除」権限は不要です。

‡ 内部 / ドメイン認証を用いるワークステーションの場合、ストレージ検査には「アクティビティログの表示」権限は不要です。

OpenLab ECM 3.x での Test Services ユーザーロールの作成

初めてのログイン時に、OpenLab ECM 3.x で「Test Services ユーザー」ロールが作成され、以下の権限が割り当てられます。

- Content: File (View, Add)
- Content: Folder (View, Add)
- Content: File Filtering (Edit)

Test Services を使用するには、ユーザーを OpenLab ECM 3.x および OLSS に（作成またはインポートで）追加し、ユーザーの権限に「Test Services ユーザー」ロールが含まれるように設定する必要があります。

これらの権限を持つユーザーは、Test Services へのログイン、履歴の表示、レポートのダウンロード、SVT およびシステムレポートの実行ができます。

OpenLab ECM でのユーザーの追加やユーザーのロールと権限の変更方法については、OpenLab ECM のオンラインヘルプを参照してください。

OpenLab ECM 3.x を使用するクライアント / サーバーコンフィグレーション

OpenLab セキュリティ検査を実行するには、ユーザーに以下の権限を追加で割り当てる必要があります。

- System: Service Administration (Run)
- System: Audit Trail (View)
- System: Roles Configuration (View, Edit)
- System: Users/Groups Configuration (View, Edit)
- セキュリティの管理 (OLSS の権限)
- アクティビティログの表示 (OLSS の権限)

OpenLab ストレージシステム検査を実行するには、ユーザーに以下の権限を追加で割り当てる必要があります。

- Content: File (Delete)
- Content: File Association (View, Add)
- Content: File Revisions (View)
- Content: Folder (Edit, Delete)
- Content: Folder Access Properties (Edit)
- Content: Move File (Run)
- Content: Move Folder (Run)
- Content: Rekey File (Run)
- System: Audit Trail (View)
- System: Filtering Configuration (Edit)
- System: Roles Configuration (View, Edit)
- System: Users/Group Configuration (View, Edit)
- System: Quick Search (Run)

ワークフロー検査を実行するには、ユーザーに以下の権限を追加で割り当てる必要があります。

- Content: File (Delete)

通信検査を実行するには、ユーザーに以下の権限を追加で割り当てる必要があります。

- 機器またはロケーションの表示 (OLSS の権限)
- 機器またはロケーションの管理 (OLSS の権限)

ログ

Test Services のログ

Test Services のログファイルは `C:\ProgramData\Agilent\LogFiles` にあります。ProgramData は非表示のフォルダーです。

TestServices.log ファイルには、Test Services とそのプラグインによって実行された操作に関する情報が含まれます。トラブルシューティングを容易にするため、プラグインは生成されたイベントにテスト固有のタグを付けてログに記録します。

別のログファイルが、Test Services Central Management がインストールされたマシンの

`C:\ProgramData\Agilent\LogFiles\TestServices_cm{timestamp}.log` にあります。このログは Test Services Central Management サービスのトラブルシューティングに使用できます。

注記

QualA 3.4 より前のバージョンからアップグレードすると、パス名が QualA から Test Services に変更されます。カスタムパスを使用してアップグレードすると、Test Services フォルダーがカスタムパスに作成されます。

Test Services の設定

このセクションでは、管理者が実行できる設定操作について説明します。

変更を行ったら、Agilent Test Services サービスを再起動し、変更を適用してください。

ポート番号の変更

Test Services のポート番号を変更するには設定ツールを利用します。

- 1 C:\Program Files (x86)\Agilent Technologies\Test Services へ移動します。
- 2 Agilent.TestServices.ConfigTool.exe を管理者として実行します。
現在設定されているポートが、Test Services サービスのステータスと一緒に表示されます。
- 3 **[Test Services TCP Port]** に、新しいポート番号を入力します。

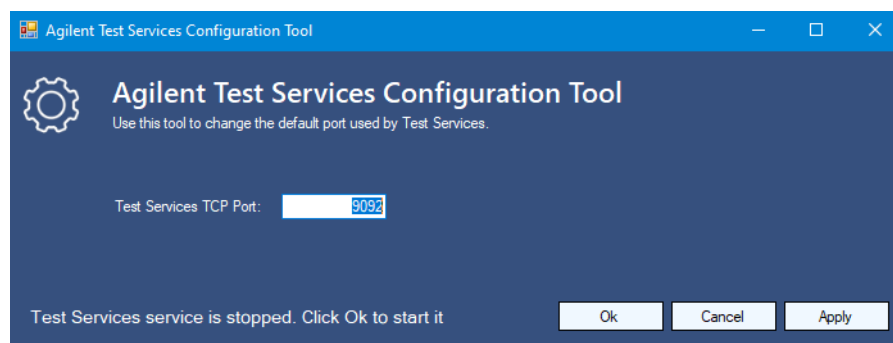


図 5 Test Services 設定ツール

- 4 **[Apply]** をクリックします。

Test Services サービスが停止します。その後、再起動されます。

- 5 **[Cancel]** をクリックして、設定ツールを閉じます。

- 6 クライアントの場合、新しいポートを使用して Test Services にログインします。（https://localhost:<new_port>）。他のコンピューターの場合、通常通りに Test Services にログインします（<https://localhost/testservices>）。

- 7 完了すると、次のログファイルに変更が記録されます。

```
C:\ProgramData\Agilent\InstallLogs\
TestServicesConfigToolLog.log.
```

- 8 リバースプロキシがインストールおよび実行されているシステム（すなわち、クライアントを除くすべてのシステム）でポート番号を変更した場合は、リバースプロキシのコンフィグレーションを変更する必要があります。以下の手順を実行してください。

- a コンピューターの管理者として、"%ProgramFiles(x86)%Agilent Technologies¥OpenLab Reverse Proxy¥Apache24¥conf¥httpd.conf" をテキストエディタ（メモ帳アプリなど）で開き、以下のセクションを変更します。

```
#<testserviceswebui>

ProxyPass /testservices https://localhost:9092/testservices
retry=3 acquire=3000 keepalive=On

ProxyPassReverse /testservices
https://localhost:9092/testservices

#</testserviceswebui>

#<testservicesrestapi>

ProxyPass /openlab/ca https://localhost:9092/openlab/ca
retry=3 acquire=3000 keepalive=On

ProxyPassReverse /openlab/ca
https://localhost:9092/openlab/ca

ProxyPass /openlab/testservices
https://localhost:9092/openlab/testservices retry=3
acquire=3000 keepalive=On

ProxyPassReverse /openlab/testservices
https://localhost:9092/openlab/testservices

#</testservicesrestapi>
```

このコンフィグレーションファイルの 6 か所すべてのデフォルトポート番号 9092 を（前のステップでツールから設定したポート番号に）変更します。

- b ファイルを保存します。
- c Apache2.4 サービスを再起動します。

注記

クライアントシステムをポート "XXX" に再コンフィグレーションする場合、Test Services にローカルからアクセスするには `https://localhost:XXX/` を使用します。Test Services にリモートでアクセスするには、`https://<client-FQDN>:XXX/` を使用します。クライアントシステムにファイアウォールが設定されている場合、ポート XXX がオープンになっていることを確認してください。

Test Services のインストール後に OpenLab CDS コンフィグレーションを変更した場合

Test Services をインストールした後に OpenLab CDS コンフィグレーションに特定の変更を加えた場合、システムで「Test Services ユーザー」ロールおよび「Test Services の実行」権限を作成するツールを実行する必要があります。

```
C:¥Program Files (x86)¥Agilent Technologies¥TestServices¥
Agilent.TestServices.PrivilegeCreatorTool.exe <username>
<password> <domain>
```

以下のコンフィグレーションの変更を行った場合はツールの実行が必要です。

- CDS AIC/ クライアントに Test Services をインストールした後に、別の OLSS サーバーに接続するよう CDS AIC/ クライアントを再コンフィグレーションした。
- 認証を **【なし】** に設定したワークステーションに Test Services をインストールした後に、認証プロバイダーを **【内部】** または **【ドメイン】** に変更した。
- OpenLab ECM 3.x と OLSS の組み合わせを使用しているクライアント / サーバーシステムで、Test Services インストール後に、別の ECM アカウントを使用するよう OLSS サーバーを再コンフィグレーションした。

Test Services のインストール後に認証を変更した場合

認証に変更を加えたら、管理ユーザーとして Test Services にログインする必要があります。これにより現在のスケジュール、通知、およびパラメータが自動的に更新されます。

Test Services テスト結果の保存場所

OpenLab Server および ECM XT

OpenLab Server および ECM XT の場合、Test Services テストの結果は、Test Services により作成された Content Management 内のプロジェクトフォルダー、**コンテンツ > Test Services Project > Test Services Results** に保存されます。Test Services Results フォルダーには、実行したテストごとにフォルダーがあり、結果ファイルが含まれます。

注記

前のバージョンの QualA からアップグレードした場合、前の QualA の結果フォルダーは引き継がれます。アップグレード後に実行したテストは、**コンテンツ > QualA Project > QualA Results** に保存されます。

ECM 3.5 および 3.6

ECM 3.5 および 3.6 の場合、Test Services テストの結果は、Test Services により作成された ECM 内のプロジェクトフォルダー、**コンテンツ > TS > TS > Test Services Project > Test Services Results** に保存されます。Test Services Results フォルダーには、実行したテストごとにフォルダーがあり、結果ファイルが含まれます。

セキュリティと証明書

デフォルトで、Test Services はインストールされたマシン上でセキュリティで保護された通信（HTTPS）を使用します。

セキュリティで保護された接続で Test Services へアクセスするため、サードパーティの証明書のインストールを必要とする場合があります。

- Test Services がインストールされていないデバイスから別のマシンの Test Services の URL へセキュリティで保護された接続でアクセスする必要がある場合。
- カスタムまたはサードパーティの証明書の使用が必要な場合。

有効な証明書がないデバイスから Test Services URL にアクセスすると、接続がプライベートではないという警告が表示されます。証明書をインストールしなくても Test Services にアクセスできますが、Test Services を開くと別の警告が表示されます。

以下の手順でサードパーティの証明書をインストールし、その証明書を使用するよう Test Services を設定してください。

Test Services にサードパーティの証明書を設定

インストールしたサードパーティの証明書を使用する場合は、その証明書を使用するよう Test Services を設定する必要があります。

注記

この手順を実行する前に、サードパーティの証明書を取得してインストールしてください。

- 1 使用する証明書のシリアル番号を検索してコピーします。
 - a Windows のコントロールパネルから、管理ツールの **【コンピューター証明書の管理】** へ移動します。
 - b **【個人】** フォルダーで、使用する証明書を見つけます。
 - c 証明書をダブルクリックし、**【詳細】** タブを選択します。
 - d **【シリアル番号】** を選択し、値をコピーします。

- 2 管理者としてコマンドプロンプトを起動し、-cert オプションと、コピーしたシリアル番号を使用して Test Services Configutatoi Tool を実行します。シリアル番号が 00ECF5187D8D286484 の例を以下に示します。

```
C:¥Program Files (x86)¥Agilent Technologies¥Test  
Services¥Agilent.TestServices.TestServicesConfigTool.exe  
-cert 00ECF5187D8D286484
```

- 3 セキュリティで保護された接続をテストするには、
https://localhost/testservices （クライアントの場合は
https://localhost:9092）で Test Services にログインします。接続がセキュ
リティで保護されている場合、ブラウザの Test Services URL の左にセ
キュリティアイコン  https://（ロックされた状態）が表示されます。

3

トラブルシューティング

トラブルシューティング 27

エラーメッセージ 31

この章では、Test Services の使用中に発生する問題のトラブルシューティングとエラーメッセージの解決方法について説明します。

トラブルシューティング

結果が不合格となる

Test Services ツールは、OpenLab ソフトウェアが期待どおりに動作することを確認します。そのため、常に期待通りの測定値が得られ、結果として作成されるレポートは「合格」になるはずですが、まれにソフトウェアが予想どおりに機能しない場合、レポートに「不合格」や「なし」のステータスが表示されることがあります。そのような場合は管理者が修正措置を行う必要があります。

「不合格」のレポートステータス

Test Services は、以下のような理由により（必ずしもこれらに限定されません）「不合格」のレポートステータスを表示することがあります。

- OpenLab CDS のファイルが壊れている
- OpenLab CDS と互換性のない Windows 更新プログラムがインストールされたこれらの問題のリスクを回避するには、以下の措置を実行してください。
- ソフトウェア（OpenLab CDS と Test Services の両方）が誤って変更されていないことを確認するために、OpenLab CDS と一緒にインストールされている Software Verification Tool を実行してください。
- マシン上で OpenLab CDS を起動します。OpenLab コントロールパネルを起動し、機器のオンラインを起動して分析を実行してみてください。これにより、CDS に問題があるかどうかを確認できます。
- まれに、Windows の更新プログラムによってインストールされた .NET Framework によって、ソフトウェアの下位互換性が失われてしまう場合があります。そのような状況が認められた場合は、問題のある Windows 更新プログラムを特定し、変更を元に戻すことを試みてください。

注意

Windows 更新プログラムをアンインストールすると、セキュリティやその他の影響が生じる場合があります。Windows 更新プログラムをアンインストールする前に、アンインストールによってシステムにもたらされる可能性のある結果や影響について理解しておいてください。システムの復元ポイントを作成し、更新プログラムをアンインストールする前の状態へシステムを復元する手段を準備してください。

通信検査が不合格となる

通信検査の「不合格」のステータスは、接続されていないコンポーネントがある場合に表示されます。

- AIC の場合、通信検査の「不合格」のステータスは、接続されていない機器がある場合に表示されます。
- クライアントの場合、通信検査の「不合格」のステータスは、システムにクライアントからの ping に応答しない AIC がある場合に表示されます。

レポートステータスが「なし」

このステータスは、「不合格」の結果よりもよく見られます。必ずしも OpenLab CDS に問題があることを意味するわけではありませんが、このステータスが頻繁に発生する場合は、OpenLab CDS の動作に異常がないことを確認してください。

「なし」の結果は、以下の場合に表示されます。

- 実行したテストが完了していない（サービスの再起動などによる）。

ワークフロー検査中にシーケンスが停止する

ドメインにあるマシンでワークフロー検査を実行すると、「シーケンス開始 < シーケンス名 >」ステップでワークフロー検査が停止する場合があります。

ワークフロー検査を正常に実行するには、機器サービスと同じユーザーアカウントで Test Services サービスを実行する必要があります。

注記

ユーザーがドメインアカウントであるかどうかは問いません。ドメイン内にないワークステーションの場合、このユーザーはローカル Windows ユーザーアカウントでもかまいません。

以下の手順を実行して、機器サービスで使用するのと同じユーザーを使用するよう Test Services サービスを更新してください。

- 1 機器サービスを実行するユーザーアカウントを確認します。
- 2 ローカルの管理者権限を持つ Windows ドメインユーザーでログインします。
- 3 コントロールパネル > すべてのコントロールパネル項目 > 管理ツール へ移動し、[サービス] をダブルクリックします。

- 4 [Agilent Test Services Service] を右クリックし、[プロパティ] を選択します。
- 5 [ログオン] タブで [アカウント] を選択し、機器サービスで使用するユーザーの資格情報を入力します。[OK] をクリックします。
- 6 [サービス] ダイアログが表示され、アカウントにサービスとしてログオンする権限が付与されたことが確認されます。[OK] をクリックします。
- 7 次の [サービス] ダイアログで、**新しいログオン名はこのサービスを停止して再起動するまでは無効です。**が表示されます。[OK] をクリックします。
- 8 Agilent Test Services サービスを再起動します。
- 9 [Agilent Test Services Service のプロパティ] ウィンドウの [ログオン] タブで指定したユーザーアカウントを使用してログインします。

Test Services のプロジェクトと機器

テストを最初に実行する時に Test Services Project が作成されます。ワークフローテスト中に、Test Services プロジェクトに追加のパラメータが設定され、Test Services 機器が作成されます。何らかの理由でこれらが削除または変更された場合、Test Services は次の実行時にこれらを再作成します。

電子メール通知が機能しない

電子メール通知が機能しない場合、以下の手順でトラブルシューティングしてください。

- OpenLab CDS コントロールパネルで電子メールが正しく設定されていることを確認してください。設定されていない場合、電子メール通知は送られません。電子メールの設定方法については、OpenLab CDS コントロールパネルのオンラインヘルプを参照してください。
- OpenLab CDS コントロールパネルから電子メールをテスト送信し、電子メールの設定が機能していることを確認してください。
- Test Services から電子メールをテストします。

a Test Services で電子メール通知を設定します。

b ブラウザーで、以下の URL を入力します。クライアント / サーバースステムの場合、サーバーは OpenLab Server のアドレス、または ECM 3.x バックエンドを使用した OLSS サーバーのアドレスになります。ワークステーションまたは Workstation Plus の場合、マシン自体になります。

```
https://<server:port>/openlab/testservicesserver/v1/health/email
```

例：

```
https://localhost:52088/openlab/testservicesserver/v1/health/email
```

これにより Test Services の通知ページからデフォルト値を使用した電子メールが送信されます。OpenLab コントロールパネルの SMTP 設定が使用されます。

次の件名で電子メールがテスト送信されます：Test Services Test email

注記

電子メールは、サーバー、ワークステーション、または Workstation Plus マシンからのみ送信されます（クライアントや AIC からは送信されません）。

エラーメッセージ

以下は、Test Services によって生成されるすべてのエラーメッセージと、問題を緩和するために講じることができる措置のリストです。

Test Services エラーメッセージ

アカウントの有効期限が切れています

- OpenLab CDS コントロールパネルでユーザーアカウントが有効であることを確認してください。

Test Services ライセンスを取得できません。システム管理者に問い合わせて問題を解決してください。

- OpenLab CDS コントロールパネルで QualA の有効なライセンスがあることを確認し、ライセンスの期限が切れていないことをチェックしてください。
- ライセンス数が不足していないことを確認してください。ライセンスの数が不足している場合は、追加のライセンスが必要です。Agilent サポートにお問い合わせください。
- ライセンスの表示をクリックしてダッシュボードを開き、FLEXERA ソフトウェア（ライセンス管理用のサードパーティシステム）が動作していることを確認してください。デフォルトでは、サーバーのダッシュボードは `http://localhost:8090`、ワークステーションおよび Workstation Plus は `http://localhost:8095` でアクセスします（localhost はライセンス情報を持つマシン）。取得済みライセンスと一致する数の、QlaSecurity という名前のライセンスがあることを確認してください。
- 次の Agilent OpenLab 関連の Windows サービスを再起動します。License Server、Licensing Support、Shared Services、Test Services。サービスを開くには、Windows キー + [R] を押し、`services.msc` と入力して [Enter] を押します。

Test Services サービスがダウンしているか利用できません。システム管理者に問い合わせてください

- このエラーは、Test Services サービスが利用できなくなった場合に発生します（ネットワークエラーか、サービス自体が停止したことによります）。ポートが開いており、サービスが実行中であることを確認してください。必要に応じて、Windows のサービスを再起動してください（services.msc を開き、Agilent Test Services サービスを再起動）。

ユーザー名またはパスワードが無効です

- Shared Services の認証メカニズムによって発生したエラーです。適切なユーザー名とパスワードであることを OpenLab CDS コントロールパネルの管理ページで確認してください。

ログオンの資格情報が無効か有効期限が切れています

- トラブルシューティング手順は「**ユーザー名またはパスワードが無効です**」の場合と同じです。

認証プロバイダーが利用できません

- Shared Services の認証メカニズムによって発生したエラーです。OpenLab CDS コントロールパネルでエラーが報告されているかどうかを確認し、問題を解決してください。

サーバーへの接続に失敗しました

- トラブルシューティング手順は「**認証プロバイダーが利用できません**」の場合と同じです。

資格情報の検証に失敗しました

- トラブルシューティング手順は「**認証プロバイダーが利用できません**」の場合と同じです。

OLSS サービスが利用できません

トラブルシューティング手順は「**認証プロバイダーが利用できません**」の場合と同じです。

Test Services の検証を続行できません - システム管理者に問い合わせてください

- トラブルシューティング手順は「**認証プロバイダーが利用できません**」の場合と同じです。

ユーザーのパスワードが設定されていません

- トラブルシューティング手順は「**認証プロバイダーが利用できません**」の場合と同じです。

ユーザーが無効です

- トラブルシューティング手順は「**認証プロバイダーが利用できません**」の場合と同じです。

ユーザーは、一時的にブロックされています

トラブルシューティング手順は「**認証プロバイダーが利用できません**」の場合と同じです。

ユーザーはパスワードを変更する必要があります

トラブルシューティング手順は「**認証プロバイダーが利用できません**」の場合と同じです。

ユーザーは割り当てられていませんが認証されました

- トラブルシューティング手順は「**認証プロバイダーが利用できません**」の場合と同じです。

Test Services を実行するための権限がありません

- ログインしているユーザーが Test Services にアクセスするための権限を持っていません。ユーザーに「Test Services ユーザー」ロールが割り当てられていることを確認してください。（「**Test Services 用のユーザーアカウント設定**」（15 ページ）を参照。）

Test Services 用のプロジェクトを作成できません。システム管理者に問い合わせてください

- このエラーは、Content Management が利用できない、または利用できるが Content Management に他の問題（ディスクの空き容量、ライセンスの問題など）がある場合に発生することがあります。Content Management に問題がないことを確認してください。それでも解決しない場合は、OpenLab のコントロールパネルから Test Services Project を削除してください。プロジェクトは次回、Test Services を実行したときに自動的に再作成されます。既存の実行結果はすべて Content Management にそのまま残されます。

ストレージにレポートがありません

- このエラーは、Content Management の該当フォルダーで PDF レポートが見つからない場合に表示されます。現在のユーザーが Test Services で使用しているフォルダーへのアクセス許可を持っていることを確認してください。このメッセージは、Content Management でファイルが直接削除またはアーカイブされた場合にも発生することがあります。その場合は Test Services でテストをもう一度実行してください。

OpenLab ソフトウェアのコントロールパネルに電子メールサーバーが設定されていません

- Test Services では、OpenLab Shared Services の電子メールの設定を使用して電子メール通知を送信します。このエラーが表示された場合、OpenLab コントロールパネルにアクセスし、電子メールの環境設定を行ってください。

OpenLab CDS ワークフロー検査エラーメッセージ

Test Services 機器のコンフィグレーションエラー: システム管理者に問い合わせてください

- このエラーは、機器が現在使用中である場合に発生することがあります。機器が使用中でないことを確認してください。確認後もエラーが続く場合は、機器を削除してください。機器は Test Services の次の実行時に自動的に再作成されます。

Test Services 用の機器を作成できません。システム管理者に問い合わせてください

- トラブルシューティング手順は「**Test Services 機器のコンフィグレーションエラー：システム管理者に問い合わせてください**」の場合と同じです。

Test Services プロジェクトの設定エラー：システム管理者に問い合わせてください

- このエラーは、Content Management が利用できない、または利用できるが Content Management に他の問題（ディスクの空き容量、ライセンスの問題など）がある場合に発生することがあります。Content Management に問題がないことを確認してください。それでも解決しない場合は、OpenLab のコントロールパネルから Test Services Project を削除してください。プロジェクトは、次回 Test Services を実行したときに自動的に再作成されます。既存の実行結果はすべて Content Management にそのまま残されます。

Test Services を実行するには Test Services 用のプロジェクトが必要です。システム管理者に問い合わせてください

- このエラーは、機器が見つかったにもかかわらず、プロジェクトが見つからない場合に発生します。Test Services は機器とプロジェクトを自動的に作成することから、このメッセージは、Test Services の処理中にプロセスが妨害された場合にのみ発生します。Test Services が OpenLab CDS から切断されていないことを確認してから、Test Services のテストを再実行してください。

Test Services の実行にはローカルの機器コントローラが必要です。システム管理者に問い合わせてください

- このエラーは、Test Services 用の機器をコンフィグレーションしようとした時に機器コントローラが利用できない場合に発生します。AIC が利用できることを確認し、再試行してください。

シーケンス開始エラー：システム管理者に問い合わせてください

- シーケンスの開始はさまざまな理由で失敗することがあります。詳細については、OpenLab CDS コントロールパネル > 管理 > 診断 セクションにある Test Services のログを参照してください。

本書の内容

Agilent Test Services の管理

- QualA のライセンスについて
- ユーザーアカウントのセットアップ
- トラブルシューティング

www.agilent.com

© Agilent Technologies, Inc. 2022

文書番号 : D0015137ja

2022 年 4 月

